私を彩る花と野菜

三条中学校　二年　近藤　千花

私の家の庭には、「私の木」が植えてある。産まれたときに祖母が私のために植えてくれた梅の木だ。毎年、春の訪れを教えてくれるように、小さな薄いピンク色の花が咲く。しばらくすると、黄緑色の葉が一枚一枚増え、気温が高くなる頃に、実がいくつかなっている。しかし、「私の木」でありながら、気付くのは近くに住む祖母が最初だ。

「今年も梅の花が咲いたね。」

「実がなっていたよ。もらっていくよ。」

梅の木に葉が生い茂る頃、コゴミが目を出す。祖母は素早く見つけ、春の味を食卓に置いてくれる。少しすると、庭の一面にクローバーが芽を出す。妹と二人で四つ葉探しに夢中になる。シロツメクサが花咲くと、青紫の昌蒲の花が咲く。椿の花が咲く。白い花びらは、自分の姿を語りかけるように雄弁に咲き誇る。春の庭は、時間の流れを私に教えてくれるようだ。

野菜を育てたり花を植えたりするのが好きな祖母は、私の庭にも花や野菜の苗を植えている。雪が解けて、めっきり春らしくなった頃、祖母はスコップや鍬で土を柔らかくする。祖母が植える私の庭は、元から畑だったわけではなく、砂場として幼い頃に遊んでいた場所である。だから、毎年冬になると土は硬くなる。しかし、水はけが適度に良いようで、毎年様々な野菜が収穫される。祖母は、スコップなどを上手に使って柔らかくし、肥料を混ぜ、畝を四本つくる。

「今年は何を植えようかな。」

野菜植え計画について、私たちに相談を持ちかける。毎年植えるのはトマトだ。二十センチくらいの高さの丈に、ぎざぎざの葉が七、八枚ついた苗を、六本程度植える。畝に穴を掘り、買ってきた苗を土ごと包むようにして、その中に植え込む。丁寧に土をかぶせ、そばに支柱を立て、つるのように伸びたトマトの茎が広がりすぎないように、倒れ込まないように、絡み合わないようにする。しばらくして、小さな黄色い花が咲いた。赤ん坊が懸命に手を広げたような花は、青くささが残るものの、すでにトマトの香りを漂わせていた。見ると、小さく実をつけていた。

野菜植え計画と同時進行で、数種類の花が植えられる。マリーゴールドにチューリップ、ベゴニア、マーガレット、コスモス……。祖母に聞くと、道の駅や産直売り場等に出かけたとき、心にとまった花を買って植えているという。そのせいか、それが何という名前の花か、祖母も分からないこともある。当然のように、私も分からない。しかし、学校から帰ってきたとき、友達と遊んで帰ってきたとき、私の気持ちと心を明るく彩ってくれている。

夏。いつものように今年も野菜が実った。真っ赤なトマトは大きいけれど、私の手のひらにちょこんと収まるくらい。鈴のようにそれぞれが寄り添うように実ったミニトマトは一つ一つが弾けそうなくらいに丸まっている。母が数個収穫し、水で洗い、食卓に並べた。皿の上にスライスされたトマトに、家族全員の箸が止まらなくなる。口に入れると、甘い中にもさわやかな酸っぱさがあった。

気温が下がる秋。「私の木」が色づき始める。赤色に染まる満天星。その上で小さなオレンジ色の実をつけるナナカマド。常緑樹の松の木と混ざり合い、一年で最も華やぐ季節だ。植物は季節によって様々な顔を見せてくれる。まるで人間のようだ。

庭作業を楽しむ祖母とは異なり、これまで私はあまり興味をもたなかった。祖母が育て、届けてくれた野菜も、食べるけれど、そのありがたさを感じて食べているほどでは決してない。花が咲けば、きれいだなとは思いつつも、手入れをしよう、水をあげよう、と思うことはなく、祖母に任せっきりだった。

ある時、祖母にある花を教えてもらった。小さな花がらせんのように列をなして咲く花。ネジリバナ。

「ばあちゃん、この花好きなんだよ。」

その花が、今年どういうわけか、庭にいくつも咲いた。家族みんなで、その花を踏まないように気をつけた。その花を数本、母が花瓶に生けて食卓に飾った。祖母が育てた野菜と、祖母が大好きな花を見て、自然と幸せな気持ちになった。彩りと豊かな味わいに、喜びとうれしさで胸がいっぱいになった。

私は自然の豊かさに恵まれて生きているのだ。しかし、これまでは、祖母と自然の恩恵に甘えるばかりだった。大きな優しさに気付いた私は、もっともっと自然に感謝の気持ちを示さなければならない。緑を育て、自然の色を増やし、自然の恩恵をたくさんの人に届けるようにしたい。まずは、祖母と一緒に野菜を収穫しよう。そして、来年どんな花を育てようか、野菜を育てようか、相談しよう。